

令和元年(2019年)の病害虫の発生状況
1 病害虫の発生経過概要及び発生原因解析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
早期水稲	葉いもち	平年:並 前年:並	平年:並 前年:やや少	・6月6半旬から発生を認め、並の発生で推移した。		・プロベナゾール剤、ピロキロン剤等の箱施用による防除
	穂いもち	平年:やや早 前年:並	平年:やや少 前年:並	・7月5半旬から発生を認め、やや少の発生であった。	・梅雨明け以降の高温、少雨	・出穂期頃のフェリムゾン・フサライド剤、アゾキシストロビン剤等による本田防除
	縞葉枯病	平年:- 前年:-	平年:- 前年:-	・発生を認めなかった。	・ヒメトビウンカのRSV保毒率が低かった(RSV保毒虫率:0.4%)。	・ベンフラカルブ剤、ピメトロジン剤等の箱施用による防除 ・エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤等による本田防除
	ヒメトビウンカ	平年:並 前年:並	平年:やや少 前年:やや多	・5月6半旬から発生を認め、平年より発生はやや少なく推移した。		・ベンフラカルブ剤等の箱施用による防除 ・エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤等による本田防除
	萎縮病	平年:- 前年:-	平年:- 前年:-	・発生を認めなかった。	・ツマグロヨコバイのRDV保毒虫率が低かった(RDV保毒虫率:0%)。	
	ツマグロヨコバイ	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	・本田では5月6半旬から発生を認め、平年並の発生で推移した。		・エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤等による本田防除
	紋枯病	平年:早 前年:早	平年:並 前年:やや多	・6月6半旬と平年より早く発生を認め、平年並で推移した。		・バリダマイシン剤、フルトラニル剤、アゾキシストロビン剤等による本田防除
	セジロウカ	平年:遅 前年:遅	平年:やや少 前年:やや多	・6月6日にネットトラップ(諫早市)で初確認し、初飛来としては平年より遅かった。主飛来は6月6半旬から7月1半旬及び7月4から5半旬で平年より少ない飛来量であった。 ・本田では6月3半旬から発生を認め、平年よりやや少ない発生で推移した。		・エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤等による本田防除
	トビイロウンカ	平年:早 前年:やや早	平年:多 前年:多	・6月7日に予察灯(五島市)において初誘殺を確認した。その後、6月30日～7月1日、7月10～11日にかけて飛来を確認し、平年より多い飛来量であった。 ・7月2半旬に圃場での発生を確認し、発生圃場率、株当たり虫数ともに7月は平年並の発生で推移したが、8月上旬に急激に増加し、平年より多い発生であった。		・エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤等による本田防除
	コブノメイガ	平年:並 前年:並	平年:並 前年:やや多	・6月7日にフェロモントラップ(諫早市)で初誘殺を確認した。飛来は、6月2半旬、7月1半旬及び3半旬に見られ、飛来量は、6月2半旬、7月1半旬は平年よりやや多く、7月3半旬は平年並であった。 ・6月6半旬から食害の発生を認め、7月上旬は発生圃場率、食害株率ともに平年より高くなったが、平年並に推移した。		・カルタップ剤、デフフェノジド剤等による本田防除
	イネクロカメムシ	平年:早 前年:早	平年:多 前年:多	・6月2半旬から発生を認め、平年より発生が多く、被害株率も高かった。		・エトフェンブロックス剤等による防除
	イネミスゾウムシ	平年:並 前年:並	平年:やや多 前年:並	・5月2半旬から発生を認め、平年よりやや多い発生であった。		・ベンフラカルブ剤等の箱施用による防除
	斑点米カメムシ類	平年:やや早 前年:やや早	平年:並 前年:並	・本田では8月上旬に一部圃場でやや多い発生であったが、平年並の発生で推移した。	・雑草地における調査では平年並の発生で推移した	・圃場周辺の雑草除去 ・出穂期以降のエトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤、エチプロール剤等による防除
普通期水稲	葉いもち	平年:早 前年:早	平年:多 前年:多	・6月6半旬に発生を認め、8月上旬以降多い発生で推移し、一部多発圃場がみられた。	・7月上中旬の寡日照と降雨、低温	・トリシクラゾール剤、プロベナゾール剤等の箱施用による防除
	穂いもち	平年:並 前年:並	平年:多 前年:多	・9月2半旬から発生を認め、その後発生は増加し、多の発生であった。	・8月中下旬の出穂期前後に曇天や降雨が多かった。	・出穂期頃のフェリムゾン・フサライド剤による本田防除
	縞葉枯病	平年:並 前年:やや早	平年:やや少 前年:やや多	・8月2半旬に発生を認め、平年よりやや少ない発生であった。	・ヒメトビウンカ第1世代のRSV保毒率が低かった(RSV保毒虫0.4%)。 ・耕種的防除の徹底(水田耕起など)	・ピメトロジン、トリフルメソピリム剤等の箱施用による防除 ・エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	ヒメトビウンカ	平年:遅 前年:遅	平年:少 前年:並	・7月2半旬から発生を認め、平年より少なく推移した。		・ピメトロジン、トリフルメソピリム剤等の箱施用による防除 ・エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	萎縮病	平年:- 前年:-	平年:- 前年:-	・発生を認めなかった。	・ツマグロヨコバイのRDV保毒虫率が低かった(RDV保毒虫率:0%)	

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
普通期水稻	ツマグロヨコバイ	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	・本田では6月3半旬から発生を認め、平年並の発生で推移した。		・ビメトロジン、トリフルメソピリム剤等の箱施用による防除 ・エトフェンプロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	紋枯病	平年:やや遅 前年:やや早	平年:多 前年:多	・7月5半旬と平年並の発生を認め、その後増加し、一部上位葉鞘への進展もみられ、多発生となった。	・8月上旬以降の高温多湿	・フルトラニル剤、ペンシクロン剤、バリダシン剤等による本田防除
	セジロウカ	平年:並 前年:並	平年:少 前年:並	・6月6日にネットトラップ(諫早市)で初確認し、初飛来としては平年より遅かった。主飛来は6月6半旬から7月1半旬及び7月4から5半旬で平年より少ない飛来量であった。 ・本田では6月5半旬から発生を認め、平年より少ない発生で推移した。	・飛来量が平年より少なかった。	・ビメトロジン剤、トリフルメソピリム等の箱施用による防除 ・プロフェジン剤、エトフェンプロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤等による本田防除
	トビロウカ	平年:早 前年:早	平年:多 前年:多	・6月7日に予察灯(五島市)において初誘殺を確認した。その後、6月30日～7月1日、7月10～11日にかけて主要飛来を確認し平年より多い飛来量であった。 ・7月2半旬に圃場での発生を確認し、発生圃場率、株当たり虫数ともに平年並で推移したが、8月下旬から増殖し始め、多発生となった。 ・普通期早稲を中心に9月上旬から坪枯れが見られ始め、9月下旬以降全枯れ圃場が散見された。	・トビロウカの飛来量が多かった。 ・セジロウカの飛来・発生が少なく、増殖に好適な環境であった。 ・8月中旬以降の断続的な降雨により適期防除ができなかった。 ・大きな飛来波が2波あったため、すべての防除適期に対応ができなかった。	・ビメトロジン剤、トリフルメソピリム等の箱施用による防除 ・プロフェジン剤、エトフェンプロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤、エチプロール剤等による本田防除
	コブノメイガ	平年:並 前年:並	平年:並 前年:やや多	・6月7日にフェロモントラップで初誘殺を確認し、主な飛来は6月2半旬、7月1半旬及び3半旬であった。 ・圃場での発生は平年並であったが、一部防除が不十分な圃場で発生が多く被害が見られた。	・長期残効箱施薬剤の普及	・クロラントリプロール剤の箱施用による防除 ・テブフェジド剤、カルタップ剤等による本田防除
	斑点米カメムシ類	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	・圃場における発生は平年並の発生であった。	・8月上旬の雑草地における発生は、平年よりやや少なかった。	・圃場周辺の雑草除去 ・出穂期以降のエトフェンプロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤、エチプロール剤等による防除
	スクミリンゴガイ	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	・移植直後、降雨により深水や冠水した圃場では被害がみられ、平年並の発生であった。		・メタアルデヒド剤等による本田防除 ・卵塊、貝の捕殺
麦	赤かび病	大麦:平年:早 前年:早 小麦:平年:並 前年:並	大麦:平年:やや少 前年:並 小麦:平年:やや少 前年:やや少	・大麦は4月5半旬、小麦は5月2半旬から発生を認め、大麦、小麦ともにやや少ない発生であった。	・出穂期から収穫期までの少雨	・開花盛期とその7～10日後の薬剤散布(チオファネートメチル、プロピコナゾール、メトコナゾール、テブコナゾール)
	うどんこ病	大麦:平年:- 前年:- 小麦:平年:並 前年:並	大麦:平年:並 前年:並 小麦:平年:少 前年:並	・大麦では発生を認めなかった。 ・小麦では平年より少ない発生であった。	・3月下旬～4月上旬の少雨	
	黒穂病	大麦:平年:並 前年:並 小麦:平年:並 前年:並	大麦:平年:やや多 前年:やや多 小麦:平年:やや多 前年:やや多	・大麦、小麦ともに5月3半旬から発生を認め、平年よりやや多い発生であった		・種子消毒(トリフルミゾール、ベノミル等)
	斑葉病	大麦:平年:- 前年:-	大麦:平年:少 前年:並	・発生を認めなかった。	・種子消毒の普及により近年減少傾向にある。	・種子消毒(トリフルミゾール、ベノミル等)
	アブラムシ類	大麦:平年:並 前年:やや早 小麦:平年:並 前年:早	大麦:平年:並 前年:やや少 小麦:平年:並 前年:並	・大麦、小麦ともに3月2半旬から発生し、その後広く発生は認められたが、1茎当たり虫数は平年並であった。		
大豆	べと病	平年:早 前年:早	平年:多 前年:多	・8月2半旬から発生を認め、平年より多い発生で推移した。	・7月の多雨及び8月中下旬の多雨	
	葉焼病	平年:やや早 前年:やや早	平年:多 前年:多	・8月2半旬から発生を認め、平年より多い発生で推移した。	・7月の多雨及び9月中下旬の台風	
	ハスモンヨトウ	平年:並 前年:並	平年:少 前年:少	・7月6半旬から寄生が見られたが、少ない発生で推移した。 ・フェロモントラップ(諫早市)の誘殺数は少なく推移した。		・クロラントリプロール剤、エトフェンプロックス剤等による防除
	鱗翅目幼虫	平年:遅 前年:遅	平年:並 前年:並	・9月3半旬からウバハ類の発生を認め、平年並の発生で推移した。		・ハスモンヨトウとの同時防除
	吸蜜性カメムシ	平年:遅 前年:遅	平年:並 前年:やや多	・9月2半旬から発生を認め、9月下旬にやや多くなったが、その後平年並に推移した。		・エトフェンプロックス剤、ジノテフラン剤による防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
ばれいしょ (秋作は18 年植付)	葉巻病	秋作 平年:並 前年:早 春作 平年:並 前年:遅	秋作 平年:やや多 前年:やや多 春作 平年:やや多 前年:やや多	秋作:11月に発生を認めた。 春作:4月下旬に発生を認め、 5月上旬に微増した。		・アブラムシ類の防除(予察情報に基づき適期一斉防除) ・種いも更新 ・野良イモ除去による圃場環境整備
	モザイク病	秋作 平年:- 前年:- 春作 平年:- 前年:-	秋作 平年:並 前年:やや少 春作 平年:やや少 前年:やや少	ほとんど発生を認めなかった。	・アブラムシ類の発生が少なかった。	・アブラムシ類の防除(予察情報に基づき適期一斉防除) ・種いも更新 ・野良イモ除去による圃場環境整備
	疫病	秋作 平年:- 前年:- 春作 平年:- 前年:-	秋作 平年:やや少 前年:やや少 春作 平年:少 前年:並	ほとんど発生を認めなかった。	・疫病適期に降水が少なかったため、	・マンゼブ、メタラキシル、ベンチアハリカルブイソプロピル、オキサチアピロリン剤等による防除 ・初発期予測モデル(FLABS)に基づく適期防除
	アブラムシ類	秋作 平年:並 前年:やや早 春作 平年:並 前年:やや早	秋作 平年:少 前年:並 春作 平年:やや少 前年:少	秋作:9月下旬から発生を認めたが、平年よりやや少ない発生で推移した。 春作:3月下旬から発生を認め、その後やや少ない発生で推移した。		・イミダクロプリド、ピリフルキナゾン、フロニカミド剤等による防除 ・黄色水盤トラップによる発生予察情報に基づく適期一斉防除
	ニシヨウモシジメ	秋作 平年:遅 前年:遅 春作 平年:やや早 前年:やや早	秋作 平年:やや多 前年:並 春作 平年:並 前年:やや多	秋作:11月下旬に発生を認めた。 春作:4月下旬に発生を認め、その後平年並みの発生で推移した。		・アブラムシ類との同時防除
	食葉性ヤカ類 (ハスモンヨトウ、シロイモシヨトウ、オオハコガ)	秋作 平年:やや遅 前年:やや早 春作 平年:並 前年:やや早	秋作 平年:多 前年:多 春作 平年:多 前年:多	秋作:9月下旬から発生を認め、その後平年より多い発生で推移した。 春作:5月上旬に発生を認めた。		・ピリダリル、フルベンジアミド、エトフェンプロックス剤等による防除
冬春きゅうり	モザイク病	平年:- 前年:-	平年:並 前年:並	ほとんど発生を認めなかった。		・アブラムシ類の防除 ・発病株の除去
	斑点細菌病	平年:- 前年:-	平年:並 前年:並	ほとんど発生を認めなかった。		・銅剤による防除
	べと病	平年:やや早 前年:やや早	平年:やや多 前年:やや多	・11月から発生を認め、その後平年より少ない発生で推移したが、1月以降増加した。	・1月中旬以降の高温 ・2月の降雨による防除不十分	・適正な湿度管理 ・マンゼブ、グリホサート、イソプロピル、TPN、シアノアミド、シメトール、ホセチル等による防除
	褐斑病	平年:並 前年:早	平年:少 前年:やや少	・1月に発生を認め、その後は発生しなかった。	・薬剤防除の徹底 ・耐病性品種の作付増加	・耐病性品種の作付け ・シエトニカルブ、チオファネートメチル、プロシメドン、TPN等による防除
	うどんこ病	平年:並 前年:並	平年:並 前年:やや少	・11月に発生を認め、その後12月まではやや少ない発生であったが、1月以降平年より多い発生で推移した。	発生初期防除の不徹底 湿度管理の不徹底	・フルチアニル、ベンチオラド、TPN、炭酸水素カリウム、メコニウム、アゾキストロビン剤等による防除
	灰色かび病	平年:- 前年:-	平年:やや少 前年:やや少	ほとんど発生を認めなかった。		・適切な湿度管理 ・被害果の除去 ・プロシメドン、メコニウム、フルチアニル、ベンチオラド、イプロジオン剤等による防除
	菌核病	平年:やや早 前年:-	平年:やや多 前年:並	・12月に発生を認め、その後は発生しなかった。	・12月上旬の高温	・適切な湿度管理 ・被害果の除去 ・灰色かび病との同時防除
	アブラムシ類	平年:やや早 前年:-	平年:やや多 前年:並	・11月に発生を認め、その後発生は無かったが、3月に再び発生した。	・11月下旬の気温上昇 ・ハウス外からの侵入	・定植時のネオニコチノイド系、ジアド系薬剤による防除 ・コナシラ類、アザミラ類との同時防除
	ミナミキイロアザミラ	平年:やや早 前年:遅	平年:やや多 前年:やや少	・1月は少発生であったが、その後平年より多い発生で推移し、4月になると減少した。	ミナミキイロアザミラに効果の高い薬剤が少ない。	・定植時のネオニコチノイド系、ジアド系薬剤による防除 ・エマメクチン安息香酸塩、スピノサド、ネオニコチノイド系等による防除 ・作付け終了後の施設内の蒸し込み ・スワルスキーカブリダニによる防除 ・防虫ネットによる侵入防止
	コナシラ類	平年:並 前年:並	平年:やや少 前年:やや少	・11月上旬から発生を認め、その後平年より少ない発生で推移した。	・薬剤防除の徹底	・定植時のネオニコチノイド系、ジアド系薬剤による防除 ・ネオニコチノイド系、トルフェンラド剤、シアントリニプロール等による防除 ・防虫ネットによる侵入防止 ・作付け終了後の施設内の蒸し込み

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
冬春トマト	モザイク病	平年：- 前年：-	平年：やや多 前年：やや多	・4月上旬に発生を認めた。		・発病株の早期採取 ・アブラムシ類の防除
	黄化葉巻病	平年：並 前年：並	平年：多 前年：並	・11月上旬から発生を認め、その後平年より多い発生で推移した。	・育苗期における防除対策が不十分だった。 ・発病株の早期抜き取りが徹底できなかった。 ・コナジラミ類防除が徹底できなかった。	・発病株の早期抜き取り及びタバコナジラミの早期防除 ・定植時の薬剤処理や生育期の薬剤散布、ハウス開口部への防虫ネット設置や黄色粘着板の設置、作付け終了後のハウスの密閉蒸し込み
	疫病	平年：- 前年：-	平年：並 前年：並	・ほとんど発生を認めなかった。		・TPN、シモキシル、シアゾファミド、マンジプロルミド、マンゼブ剤等による防除
	葉かび病	平年：並 前年：やや遅	平年：やや少 前年：少	・3月上旬に発生を認め、その後平年より少ない発生で推移した。		・換気や土壌水分管理、発病葉の除去及び圃場外への持ち出し ・ベンチオピラド、TPN、アジキストロビン剤等による防除 ・抵抗性品種の作付け
	灰色かび病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・12月に発生を認め、その後平年並の発生で推移した。		・フロシドン、ベンチオピラド、フルシオキニル、ハニピリム、ヒリベンカルブ剤等による防除 ・くん煙剤の利用 ・発病果・葉の除去と適正換気
	アブラムシ類	平年：遅 前年：-	平年：並 前年：-	・5月下旬に発生を認めた。		・コナジラミ類との同時防除
	ハモグリバエ類	平年：並 前年：-	平年：並 前年：やや多	・11月下旬に発生を認め、その後平年並みの発生で推移した。		・イマメクチン安息香酸塩、シロシジ、ネオコチノイド系剤等による防除
	ハコカ類	平年：- 前年：-	平年：並 前年：並	・ほとんど発生を認めなかった。		・クロラントリプロール、ヒリタリル、スピネトラム、イマメクチン安息香酸塩、スピノサド、IGR剤等による防除
	コナジラミ類	平年：並 前年：並	平年：多 前年：並	・11月上旬に発生を認め、その後平年より多い発生で推移した。	・冬季が平年より温暖であったため、増殖に好適であった。 ・抵抗性品種の導入がすすみ、導入圃場においては防除に対する意識が低くなっている。	・定植時の薬剤処理や生育期の薬剤散布、ハウス開口部への防虫ネット設置や黄色粘着板の設置、作付け終了後のハウスの密閉蒸し込み ・ヒリダベン、ヒリルキナゾン、ネオコチノイド系、スピネトラム剤等による防除
いちご(本圃18年植付)	炭疽病	平年：やや遅 前年：並	平年：並 前年：並	10月下旬に発生を確認したが、その後は発生は無かった。	・育苗圃からの持込。発病が定植直後ではなく、マルチ後となった。	・育苗、定植時健全株の選別の徹底 ・発病株の早期発見、早期除去
	萎黄病	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：並	1月下旬に発生を認め、その後は発生は無かった。	・1月の高温	・育苗、定植時健全株の選別の徹底 ・発病株の早期除去 ・ダゾメット剤、クロルピクリン剤等による土壌消毒
	うどんこ病	平年：- 前年：-	平年：並 前年：やや少	巡回調査においてはほとんど発生を認めなかった。	・うどんこ病の耐性がやや高い品種「ゆめのか」作付け増加	・古葉、発病葉の除去 ・被害果の除去
	灰色かび病	平年：やや遅 前年：早	平年：多 前年：やや多	12月上旬の高温と連続した降雨により多発した。1月には防除や除去作業により平年より少ない発生となった。その後も平年より少ない発生となった。	・灰色かび病が発生しやすい品種「ゆめのか」作付け増加により増加 ・12月上旬の平年を上回る高温と多雨	・花卉の除去 ・ハウス内湿度管理 ・被害果の除去 ・ベンチオピラド剤、イプロジオン剤、プロシドン剤、メバニピリウム剤、Qol剤等による防除 ・くん煙剤による防除
	アブラムシ類	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	9月下旬に発生を認め、11月下旬に平年より発生量が増加したが、その後は平年並に推移した。		・ビメトロジン剤、フロニカミド剤、アセタミプリド剤等による防除
	ハダニ類	平年：並 前年：遅	平年：やや少 前年：少	定植後から発生は確認していたが寄生株率が少なかった。防除、天敵利用の効果も高く、栽培期間中平年より少ない発生となった。	・育苗圃からの持込 ・新規薬剤の登録	・ビフェナゼート剤、ミルベメクチン剤、エマメクチン安息香酸塩剤、気門封鎖剤等による防除 ・天敵による防除 ・アバメクチン乳剤、スピロテトラマト水和剤による定植前防除
	ハスモントウ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや多	9月下旬から発生を認め、10月上旬に発生が拡大した。10月下旬以降は平年より少ない発生で推移した。	・9月以降の高温少雨 ・大豆で多発生し、ビニール展張前に食害された	・クロラントリプロール剤、フルベンジアミド剤、クロルフェニル剤、ヒリダリル剤、エマメクチン安息香酸塩剤等による防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
いちご(育苗圃19年植付)	炭疽病	平年:並 前年:並	平年:並 前年:やや少	7月上旬に発生を認め、9月上旬まで平年より少ない発生で推移した。	・薬剤防除、ローテーション散布の徹底 ・発病株の早期発見、除去の徹底	・発病株の除去 ・高設育苗 ・育苗床全面マルチ被覆 ・雨よけ育苗 ・親株床の土壤消毒 ・ジエトフェンカルブ剤・チオファネートメチル剤、プロピネブ剤、有機銅剤、マンゼブ剤、フルジオキシニル剤等によるローテーション防除
	萎黄病	平年:並 前年:早	平年:並 前年:やや少	5月下旬に発生を認め、その後平年より少ない発生で推移した。	・罹病親株使用による苗感染	・発病株の除去 ・ダゾメット剤、クロルピクリン剤等による土壤消毒
	うどんこ病	平年:- 前年:-	平年:少 前年:並	巡回調査においてはほとんど発生を認めなかった。	・うどんこ病の耐性がやや高い品種「ゆめのか」作付け増加	・古葉、罹病葉の除去
	輪斑病	平年:並 前年:並	平年:並 前年:やや多	5月下旬に発生を認め、その後は平年並で推移した。		・被害葉の除去 ・一部の炭疽病及びうどんこ病防除薬剤による同時防除
	アブラムシ類	平年:並 前年:並	平年:やや多 前年:やや多	5月上旬に発生を認め、5月中は平年より多く発生したが、6月以降は平年並で推移した。	・5-6月の少雨	・アセタミプリド剤、フロニカミド剤等による防除
	ハダニ類	平年:並 前年:並	平年:やや多 前年:並	5月上旬に発生を認め、9月上旬まで平年を上回る発生で推移した。	・前年産本圃からの持込 ・7-8月の高温 ・薬剤感受性の低下	・ミルベメクチン剤、ピフェナゼート剤、エマメクチン安息香酸塩剤、気門封鎖剤等による防除 ・アバメクチン乳剤、スピロテトラマト水和剤による定植前防除
	ハスモンヨトウ	平年:並 前年:並	平年:並 前年:やや少	5月上旬に発生を認め、6月上旬から8月上旬まで平年より多く発生したが、8月下旬以降は平年より少なく推移した。		・ピリダリル剤、フルベンジアミド剤、クロラントラニプロール剤、エマメクチン安息香酸塩剤等による防除
たまねぎ(18年植付)	白色疫病	平年:やや早 前年:-	平年:並 前年:やや多	2月下旬から発生を認め、その後発生は治まったが3月下旬に発生した。		・べと病との同時防除
	べと病	平年:やや早 前年:並	平年:やや少 前年:並	2月上旬から発生を認め、4月下旬まで発生した。4月以降は平年を上回る発生で推移した。	・3月の平年を大きく上回る高温と多雨により発生が拡大した。 ・多発圃場においては残渣のすき込みにより圃場内の菌密度が高まっている。	・越年罹病株抜取り処分の徹底 ・地域一斉防除の徹底 ・マンゼブ剤の連続散布による予防的防除の徹底。 ・春季のベンチアバリアルブイソプロピル剤等による防除の徹底
	ホトリチス属菌による葉枯症	平年:やや遅 前年:やや遅	平年:やや少 前年:少	3月に発生を認めた。	3月の高温と多雨。	・排水対策(高畦や明渠設置等)
	ネギアザミウマ	平年:並 前年:並	平年:多 前年:並	11月上旬から発生を認め、平年並の発生で推移した。		・アセフェート・アセタミプリド・スピネトラム剤等による防除
冬レタス	斑点細菌病	平年:並 前年:遅	平年:やや多 前年:やや少	12月-1月に発生を認めた。		・銅水和剤、オキシソリニック酸剤による防除
	腐敗病	平年:- 前年:-	平年:やや少 前年:やや少	ほとんど発生を認めなかった。		・銅水和剤、オキシソリニック酸剤による防除
	灰色かび病	平年:並 前年:早	平年:並 前年:少	11月下旬に発生を認めた。		・イプロジオン、ベンチオキサド、フロシドン剤等による防除
	菌核病	平年:やや遅 前年:並	平年:やや少 前年:やや少	12月に発生を認めた。		・イプロジオン、ベンチオキサド、フロシドン剤等による防除
	オオタバコカ	平年:並 前年:早	平年:並 前年:並	12月に発生を認めた。		・フルベンジアミド、エマメクチン安息香酸塩、ピリダリル剤等による防除
	ハスモンヨトウ	平年:並 前年:早	平年:やや多 前年:やや多	11月下旬から発生を認めた。		・クロラントラニプロール、フルベンジアミド、エマメクチン安息香酸塩、ピリダリル剤等による防除
	アブラムシ類	平年:並 前年:早	平年:並 前年:並	11月上旬から発生を認め、平年並みの発生で推移した。		・チアメトキサム、ジメテフラン、シアントラニプロール剤等による防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
かんきつ	そうか病	葉 平年:並 前年:並 果実 平年:遅 前年:遅	葉 平年:やや少 前年:やや少 果実 平年:やや少 前年:やや少	・春葉では平年並の5月上旬から発生を認め、平年よりやや少ない発生量となった。 ・果実では8月上旬に発生を認め、やや少ない発生量であった。	・葉では3月中旬～4月上旬の少雨。 ・果実では5月上旬～6月中旬の少雨。	・イミベンコナゾール剤、ジチアノン剤等による発芽期の防除 ・QoI剤等による灰色かび病との同時防除
	かいよう病	葉 平年:並 前年:並 果実 平年:やや遅 前年:やや遅	葉 平年:並 前年:並 果実 平年:並 前年:並	・春葉では平年並の5月上旬から発生を認め、平年並の発生量であった。 ・果実では8月上旬に発生を認め、その後、平年並の発生量であった。	・近年台風の襲来が少なく、伝染減が少なかった。 また、今年台風の襲来は多かったが、発病枝葉の除去が徹底されている。	・無機銅水和剤による防除 ・発病枝葉の除去 ・防風対策の強化
	黒点病	平年:やや遅 前年:遅	平年:やや少 前年:やや多	・8月上旬から発生を認め、9月下旬から増加したが平年より少なく推移した。また、前期感染型より後期感染型病斑が多かった。	・7月の多雨及び9月中下旬の多雨 ・9月下旬の台風	・マンゼブ剤、マンネブ剤による防除
	ミカンハダニ	平年:並 前年:並	平年:やや少 前年:並	・6月上旬まで平年並みで推移していたが、7月上旬以降平年よりやや少なく推移した。	・7月の多雨及び9月中下旬の多雨	・冬季、夏季のマシン油乳剤による防除 ・8月下旬～9月上旬のピフルブミド剤、シエノピラフェン剤等による防除
	ミカンサビダニ	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	・期間を通じて平年並の発生であった。		・ピリダベン剤等による防除、シエノピラフェン・ピリダベン混合剤によるミカンハダニとの同時防除
	チャノキイロアザミウマ	平年:並 前年:遅	平年:並 前年:並	・黄色粘着トラップでは5月は平年並、6月は平年より少なく推移し、全体としては平年よりやや少なかった。		・クロルフェニル剤、ネオニコチノイド系剤およびシアントラニプロロール剤等による防除 ・光反射シートによる抑制
	カメムシ類	7月以前 平年:遅 前年:遅 8月以降 平年:やや遅 前年:遅	7月以前 平年:少 前年:少 8月以降 平年:並 前年:やや多	・越冬世代の誘殺量は平年より少なく推移した。当年世代は平年より少なく推移していたが、9月に入ると誘殺量が増え平年並で推移した。 ・ヒノキからは9月上旬ころ離脱したとみられる。	・越冬世代は平年より少なかったが、ヒノキきゅう果の着生量は平年より多かった。 ・一部8月中旬の台風等により一部強制離脱した。	・合成ピレスロイド系剤、ネオニコチノイド系剤による防除
	マルカイガラムシ類	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	・8月上旬から発生が見られ、期間を通じて平年並の発生であった。		・冬季のマシン油乳剤、夏季の有機リン剤等による防除
びわ	がんしゅ病	平年:並 前年:並	平年:少 前年:並	・発生量は平年より少なかった。		・無機銅水和剤による防除
	灰斑病	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	・発生は5月上旬から認め平年並で推移した。		・春葉及び夏葉伸長期の銅・カスガマイシン剤による防除 ・開花期のイミノクタジナルベシル酸塩剤等による防除
	ナシヒメシクイ	平年:並 前年:やや遅	平年:並 前年:並	・巡回調査では8月上旬に発生を認めた。 ・フェロモントラップによる誘殺量は7月まで平年より少なく推移したが、8月上旬以降平年並で推移した。		・カルタップ剤による防除
	カメムシ類	平年:やや遅 前年:やや遅	平年:やや少 前年:少	・フェロモントラップによる誘殺量は平年より少なく推移した。	・チャバネアオカメムシの越冬量が平年より少なかった。	・合成ピレスロイド系剤、ネオニコチノイド系剤による防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
なし	黒星病	平年: やや遅 前年: やや遅	平年: 少 前年: やや少	・5月下旬に初発生を確認したが発生は少なかった。	・開花期の3月下旬～4月上旬の少雨	・ジフェノコナゾール剤、イミノクタジンアルベシル酸塩剤、Qoi剤等による防除
	赤星病	平年: 並 前年: 並	平年: やや多 前年: やや多	・4月上旬に初発生を確認し、5月上旬以降平年よりやや多く推移した。		・DMI剤による防除
	うどんこ病	平年: 遅 前年: やや遅	平年: 並 前年: やや多	・期間を通じて平年並の発生であった。		・DMI剤等による防除
	ナシヒメシンクイ	平年: 並 前年: やや遅	平年: 並 前年: 並	・巡回調査では発生は認めなかった。 ・フェロモントラップによる誘殺量は7月まで平年より少なく推移したが、8月上旬以降平年並で推移した。		・ネオニコチノイド系、合成ピレスロイド系剤による防除
	ハダニ類	平年: 並 前年: やや遅	平年: やや少 前年: やや少	・6月下旬に発生を認め、平年より少なく推移した。		・ミルベメクチン剤、シエノピラフェン剤等による防除
	カメムシ類	葉 平年: 並 前年: 並 果実 平年: 遅 前年: 遅	葉 平年: やや少 前年: やや少 果実 平年: やや少 前年: やや少	・越冬世代の誘殺量は平年より少なく推移した。当年世代は平年より少なく推移していたが、9月に入ると誘殺量が増え平年並で推移した		・合成ピレスロイド系剤、ネオニコチノイド系剤等による防除
	アブラムシ類	平年: 並 前年: 並	平年: 並 前年: やや多	・5月下旬に一時的に発生が増加したが、それ以外は平年よりやや少なく推移した。		・ネオニコチノイド系剤等による防除
ぶどう	黒とう病	平年: やや早 前年: 並	平年: 並 前年: 並	・平年よりやや早く6月上旬に発生を認め、期間を通じて平年並みで推移した。		・Qoi剤、ジチアノ剤、マンゼブ剤等による防除
	べと病	平年: やや遅 前年: やや遅	平年: 並 前年: やや多	・発生時期は平年並の5月下旬から認められ、期間を通じて平年並で推移した。	・7月上旬の早い梅雨明けにより、8月まで降雨が少なかった。	・アミスルプロム剤、マンジプロバミド剤、マンゼブ剤、酸アミド系剤等による防除
	うどんこ病	平年: 並 前年: 並	平年: 並 前年: 並	・期間を通じて平年並の発生であった。		・DMI剤等による防除
	チャノキイロアザミウマ	平年: 並 前年: 並	平年: やや少 前年: 並	・黄色粘着トラップでは5月は平年並、6月は平年より少なく推移し、全体としては平年よりやや少なかった。		・ネオニコチノイド系剤、合成ピレスロイド系剤、有機リン系剤等による防除
茶	炭疽病	平年: 早 前年: 並	平年: やや少 前年: 並	・平年より早い5月上旬から発生し、平年よりやや少なく推移した。		・DMI剤等による防除
	チャノココクモンハマキ	平年: 並 前年: 並	平年: 並 前年: 並	・フェロモントラップ(東彼杵町)での越冬世代の誘殺時期が平年より早く4月から週殺され、誘殺数は平年より多く推移した。圃場での巻葉数は平年並みで推移した。	・2月～3月の高温 ・3月下旬～4月上旬の少雨	・エマメクチン安息香酸剤、有機リン系剤、IGR剤による防除
	チャノホソガ	平年: やや早 前年: 並	平年: 並 前年: やや少	・フェロモントラップ(東彼杵町)の誘殺数は、第1世代は平年並みで推移し、第4世代は平年より多く推移した。圃場での巻葉率は期間中、平年より少ない発生であった。		・チャノココクモンハマキとの同時防除
	チャノミドリヒメヨコバイ	平年: 並 前年: やや早	平年: やや多 前年: 多	・7月までやや多～多発生で推移し、8月以降平年真実で推移した。		・ネオニコチノイド系剤等による防除
	チャノキイロアザミウマ	平年: 並 前年: 並	平年: 並 前年: 並	・4月の発生はやや多かったが、期間を通じて発生は平年並みで推移した。		・ネオニコチノイド系剤等による防除
	カンザワハダニ	平年: 並 前年: 並	平年: 並 前年: 並	・発生は6～7月に多く、その他の期間はやや少なく推移した。		・クロルフェナビル剤、ミルベメクチン剤等による防除
	クワシロカイガラムシ	平年: 並 前年: 並	平年: 並 前年: やや少	・7月に平年よりやや多く発生したものの、それ以外の期間はやや少なく推移した。		・有機リン系剤、IGR剤、ピリプロキシフェン剤等による防除 ・防除情報による防除適期の提供